

ほんばこ



No. **49**

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第 49 号 (通巻第 65 号)

2016 年 3 月 18 日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

日本教育会館 5 F

教育図書館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<http://www.jec.or.jp/tosho/>



● 目 次 ●

- | | | |
|-------------------------------------|-------|-------|
| ・『視座を高く、視野を広くする「読書」』 | 藤川 伸治 | 2~4 p |
| ・『教育図書館の歴史』 | 横川 敏晃 | 4~6 p |
| ・最近の受入図書 (2015 年 12 月~2016 年 3 月受入) | | 6 p |
| ・教育図書館のご案内 | | 8 p |

視座を高く、 視野を広くする「読書」

藤川 伸 治

2月11日、日教組青年部の集会で話をする機会をいただいた。会場の机の上に、前半分に座っている方には図1を、後ろ半分の方には図2をおいておいた。



(図1)



それぞれの図をじっくり観察してもらった後で図3を見てもらう。

図3を見て、老婆の絵に見えるか、若い女性の絵に見えるか、挙手をしてもらった。最初に、図1の老婆の絵を見た教職員のほとんどは老婆の姿

にしか見えなかったし、図2の若い女性の絵を見た方は若い女性にしか見えなかった。

読者のみなさんも実験をやってみてほしい。まず、図2と図3を隠して図1をじっくりと眺め、その後図3を見る。次に、図1と図3を隠して図2を眺め、図3を見る。見え方がちがって見えるのではなかろうか。(図3)



この実験は、私たちの生活や人間関係のあり方について実に多くのことを教えてくれる。まず、経験によって受ける条件づけが私たちの知覚やものの見方、捉え方にどれほど強烈な影響を与えているかをよく示している。ほんの十数秒の条件づけさえ、これほどまでに強く私たちの見方に大きな影響を与えているとすれば、今までの人生で受けてきた条件づけからどれほど巨大な影響力があるだろうか。自分が生まれ育った家庭、学校、職場、友達、ネットやテレビから受ける情報など、それらすべてが無意識のうちに私たちに影響を与え、ものの見方、捉え方を形成している。

この実験から得られるもうひとつの教訓は、周りの人との接し方は私たちの見方、捉え方に影響されているということだ。自分は客観的かつ正確に物事を見ているつもりでも、他人もまた、鮮明かつ客観的に全く違った見方をしている。人は、物事があるがままに、つまり客観的に見ていると思いついてしまいがちである。しかし、私たちは世界をあるがままに見ているのではなく、私のあるがままに(条件づけされたままに)見ている。

いわば、自分の「クセ」（「認知のゆがみ」）なのである。自分の見方、捉え方を「いい」、「悪い」と評価する必要はない。

青年部の方々には、自分自身の見方・捉え方には「クセ」があることを自覚し、他の人の意見に耳を傾け、その人の見方・捉え方を受け入れること、その結果、はるかに客観的で、より大きな絵が見えてくると話をした。また、本を読む時間も必要だ。活字を通じて、自分にはない見方、捉え方を知り、また、自分の「クセ」との対話にもつながるからだ。

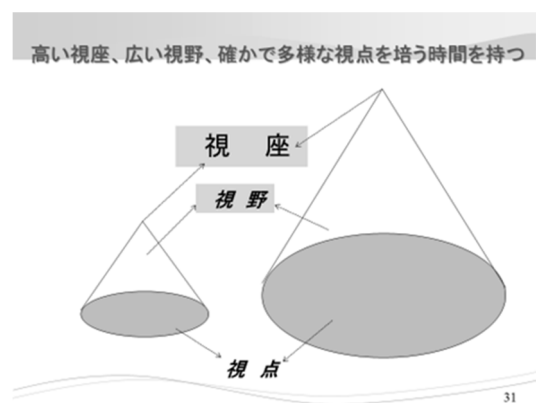
次に、常葉大学大学院の紅林伸幸教授らのグループが2013年～14年、小中学校教員の社会意識や教育観を調べ、1,500人から回答を得た結果を紹介した朝日新聞「社説・余滴」（2016年2月5日）を配布し、自分自身を振り返ってみてもらった。この調査をしたグループが注目したのは「日本の30年後は明るいか」との質問への答えである。「とても」「まあそう思う」と答えた教員が計22%。その楽観派を「あまり」「まったく思わない」と回答した78%の懐疑派と比較した。社会・政治意識について、楽観派は懐疑派より「最優先の政治課題は経済発展である」「競争原理は必要である」と考えている。「日本は平等な社会」と考える割合も懐疑派より多い。懐疑派には、貧困や格差というわが国の現状はどう映っているのだろうか。

教育観について「教育課程が適切に教えられていることを教育委員会が管理・指導することは必要である」とも思っている。教委の管理を望んでいるのだ。さらに、驚いたことに、「教師は自身の労働条件や賃金の改善を求めるべきではない」とする割合も高い。つまり、楽観派は、現在進行中の新保守主義的な社会経済政策に忠実であり、今の政策によって30年後には幸せな生活が保障されるという社会への信頼感がある。また、超勤多忙化で悲鳴が上がっている教育現場の労働環境を変えるために自ら行動する必要性を感じることも

なく、従順なのである。こうした楽観派はベテランより若手に多いこともわかった。世代交代が急激に進んでおり、楽観派はさらに拡大しそうである。その理由について、「教師が現場に山積する課題をこなすのに精いっぱい自ら考えなくなっているためではないか。社会の問題を見つめないから、政権の大きな設計図も無批判に受け入れ、幸せな未来を夢見ることができるのではないか」と紅林教授のコメントが紹介されている。自分自身の見方、捉え方の「クセ」をさらに強化している。

講演を聞いたある教職員は、「楽観派の見方に知らず、知らずのうちになっていることがあった。格差社会の問題に気づかずに、どの子も同じように見てしまうことによって、『貧しさ』を抱える子を理解できずに傷つけてしまうことにつながることは、経験からわかっている」と感想を寄せてくれた。目の前にいる子どもとしっかりつながろうとすれば、その子がどのような生活背景を抱えて学校に通っているのかを問う姿勢が自ずと培われてくる。

また、「『日本の30年後は明るい』方がよいに決まっている。しかし、私が同じ調査を受けた時は、きっと『懐疑派』になります。『上』から言われたことに何の疑問を感じず、受け入れるだけで『明るい未来』になるのであれば、もうなっているはずですよ」という感想もあった。



講演は、高い視座、広い視野、確かで多様な視点を培う時間を持つ必要があると締めくくった。

「『認知のゆがみ』に私自身も陥っていたと感じました。夜遅くまで働くのはあたり前、土日でも部活動するのはあたり前……。身体を壊したら『自分がふがない』。少し自分について考えてみようと思いました。」と語ってくれた。

（日本教職員組合 組織労働局長・
一般財団法人日本教育会館 相談室運営委員）

教育図書館の歴史

横 川 敏 晃

教育図書館は日本教職員組合（以下、日教組）、国民教育研究所（当時、現国民教育文化総合研究所）、財団法人日本教育会館（当時、以下、会館）の3者共同設立により1966年10月に財団法人日本教育会館の附設図書館として発足しました。

日教組は膨大な組合の運動資料のほか一般の教育関係図書、教研全国集会の報告書などの貴重な教育実践記録を多数所蔵していました。一方、日教組結成10周年を期して1957年に設立された民研も多くの教職員の支援、教育運動関係者、全国各大学、研究機関の協力を得て、図書資料合わせて約16,000点を収集していました。加えるに会館も前身の旧帝国教育会時代の貴重な蔵書、戦後、全米教育協会（National Educational Association、略称NEA）から寄贈された洋書などを多数所蔵し、その整理・保管の問題を抱えていました。

三者の要求とそれぞれが抱えていた条件を考え合わせ、統一的な整理、保管、公開して利用に供する機構をつくることにより、運動内部、研究所内部はむろん、社会的にも大きく貢献できる施設として、旧教育会館3階の一室に誕生、産声を挙げました。民研森田俊男所長（当時）を図書館長に、梅根悟和光大学学長、海老原治善所員（いず

れも当時）が運営委員に任じられるという、実に勿体ないくらいの陣容で、教育図書館にかける当時の日教組、民研の力の入れようが窺われます。

1973年
（昭和48年）
財団法人
日本教育会館▶

写真：
『日本教育会館
50年沿革史
— 帝国教育会
から日教組へ — 』



奇しくも本年10月でちょうど半世紀、現場の教職員をはじめ、研究者、学生などの利用に供し、真に研究と教育実践運動に資してきたといささか自負していますが、公益法人の在り方、社会的貢献の問題が問われる今日の状況を鑑みると、当時の宮之原貞光理事長、榎枝元文常務らに代表される民研及び会館理事会の識見、先見性に改めて思いを致します。

現在、蔵書は約65,000冊を数えますが、日教組、民研（現教育総研）刊行物はむろん、特色あるコレクションとしてまず挙げられるのが教育研究全国集会報告書をはじめとする教職員の貴重な教育実践記録です。次いで全国各都道府県教職員組合の組合史、機関紙誌、平和資料、文部統計調査・学習指導要領などがあります。また、1950年代後半から1960年代のいわゆる民族自決主義の国際情勢を反映してアジア・アフリカ、ラテンアメリカ諸国の洋書と旧ソ連を含むヨーロッパ諸国、アメリカの教育雑誌、新聞なども多数所蔵しています。このうちロシア語関係図書・雑誌は合計約2,000冊を数え、当時の民研の研究体制の一端が窺えますが、残念ながら未登録で今後の対応が課題となっています。

しかし、顧みますとこの半世紀の間、けっして順風に今日を迎えたわけではありません。広く存在が認知され、図書資料が充実し、利用者からの期待が高まるなかで大きな課題に直面しなければならないことが2回ほどありました。それは1974年から1977年に至る旧教育会館の解体にともなう移転と新会館の竣工までの3年余にわたる仮施設（目白の通称ホワイトビル）での開館、いま一つは1994年2月の現会館内での8階から5階への移転です。後者の際は筆者自身が係わりましたが、それは図書館としてよりふさわしい環境を求めている移転でした。



▲教育図書館●8F

1977年4月、教職員の誰もが待ち望んでいた現会館が竣工し、教育図書館はそれまでの言わば仮住まいから、装いも新たに8階の一角に設けられました。しかし、真ん中の廊下を挟んで300名収容の会議室に隣接していたことから、休憩時の喧騒、喫煙の問題などが当初からありました。たまたま、事務所階である5階で図書館とほぼ同面積である事務所が転出することになり、その跡への移転となりました。当時の日本教育会館大場昭寿館長の英断です。幸い同じ建物内での移転であり、利用者にそれほどの不便をかけることもなく2ヵ月ほどの休館で済みましたが、前者の場合は新館竣工までの3年近い長丁場のことであり、すでに40,000冊近かった図書資料の搬出、書架の解体と組み立て、さらには配架等、いかに苦労されたかは容易に想像できます。この期間に、日教組が行った春闘統一ストに係わり、当局のいわゆる

「ガサ入れ」が行われ、緊迫した局面もあったと先輩から聞いています。

ところで、当館と同名の「教育図書館」が旧国立教育研究所（現国立教育情報センター）内にあり、2016年の現在にいたっても、なお誤って来館される利用者が跡を絶ちません。日本教育会館は戦前の旧帝国教育会の建物、財産などを継承しており、継続性はないものの古く明治時代、大日本教育会が設置した附属書籍館にまでその系譜を辿ることができ、この歴史は誇りを持ってよいことと思います。

現在、日本教育会館が位置する一ツ橋という地域には明治前期、前述の大日本教育会をはじめ東京大学の前身である開成所や東京外国語学校、東京商業学校、体操伝習所などの教育機関が蟠集し、一時期文部省も置かれたことから近代日本文教発祥の地と言われています。この地に「教育図書館」の看板を掲げる意義と責任の重さを改めて感じています。

看板と言えば、現在当館の入り口に掲げている「教育図書館」の看板は、1966年の当館発足の事実上の産みの親である榎枝元文先生にお書きいただいたものです。常々図書館の重要性を述べておられた先生でしたが、その榎枝先生も先年鬼籍に旅立たれた。教育図書館の揺籃期から今日までご指導、ご教示をいただいた榎枝先生はじめ歴代図書館長あるいは多くの運営委員の先生がたに改めて感謝の意を申し上げ、拙文の筆を置きます。



現在の5階 教育図書館

最近の受入図書

(2015年12月～2016年3月受入)

【日本教職員組合刊行物】

『健康権確立に向けて 第55回(2015年) 日教組養護教員部研究集会記録』日本教職員組合編、(株)アドバンテージサーバー 2016.1

【教育総研刊行物】

『季刊フォーラム教育と文化82 2016 Winter 特集：東日本大震災と原発事故から5年』国民教育文化総合研究所編・発行 2016.1

【平和資料】

『資料集 平和を語り継ぐ』静岡県教職員組合婦人部、静岡県退職婦人教職員連絡協議会編 [静岡県教職員組合] [1989.4]

『その日がくる前に』日高新報戦後70年プロジェクト取材班著 日高新報社(和歌山) 2015.12

『戦死やあわれ』竹内浩三著 岩波書店 2003.1

『私たちの“戦争”体験』東京都立戸山高校1962年卒有志編集委員会 2015.12

【社会・教育・軍事関係】

『なぜあの保護者は土下座させたいのか』関根眞一著 教育開発研究所 2015.11

『子どもの貧困連鎖』保坂渉、池谷孝司著 新潮社 2015.12

『英語教科書は〈戦争〉をどう教えてきたか』江利川春雄著 研究社 2015.7

『国際バカロレアとこれからの大学入試改革』福田誠治著 亜紀書房 2015.12

『英語学習は早いほど良いのか』バトラー後藤裕子著 岩波書店 2015.8

『高校生を主権者に育てる』広田照幸監修・著 北海道高等学校教育経営研究会編著 学事出版 2015.12

『五色の虹』三浦英之著 集英社 2015.12

『世界と日本の小学校の英語教育』西山教行、大

木充編著 明石書店 2015.12

『戦後日本の教育委員会』大島菜穂子著 勁草書房 2015.12

『「日本型学校主義」を超えて』戸田忠雄著 筑摩書房 2015.12

『小学校で法を語ろう』W. キャシディ&R. イエーツ編著 同志社大学法教育研究会訳 成文堂 2015.12

『ブラッドランド 上・下』ティモシー・スナイダー著 布施由紀子訳 筑摩書房 2015.10

『NHKはなぜ、反知性主義に乗っ取られたのか』上村達男著 東洋経済新報社 2015.10

『プーチンの実像』朝日新聞国際報道部著 朝日新聞出版 2015.10

『「子どもを殺してください」という親たち』押川剛著 新潮社 2015.7

『日本語学習・教育の歴史』河路由佳著 東京大学出版会 2016.1

『毒親の棄て方』スーザン・フォワード著 羽田詩津子訳 新潮社 2015.10

『無戸籍の日本人』井戸まさえ著 集英社 2016.1

『セクシュアルマイノリティ第3版』セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク編著 ロニー・アレキサンダーほか著 明石書店 2012.9

『大田堯・寺脇研が戦後教育を語り合う』大田堯・寺脇研著 学事出版 2015.7

『図表でみる教育 2015年版』経済協力開発機構(OECD)編著 明石書店 2015.12

『子育てハッピーアドバイス』明橋大二著 1万年堂出版 2015.12

『なぜ外国語を身につけるのは難しいのか』森島泰則著 勁草書房 2015.12

『戦う民意』翁長雄志著 KADOKAWA 2015.12

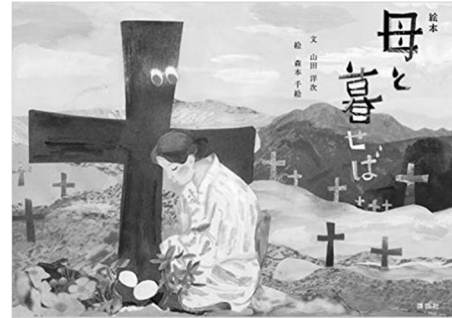
『資質・能力 理論編』国立教育政策研究所編 東洋館出版 2016.2

『民主主義を立て直す』片山善博著 岩波書店

- 2015.11
- 『原発と自治体』金井利之著 岩波書店 2012.3
- 『帰還兵はなぜ自殺するのか』デイヴィッド・フィンケル著 亜紀書房 2015.2
- 『沈みゆく大国 アメリカ〈逃げ切れ！ 日本の医療〉』堤未果著 集英社 2015.5
- 『ヒトとイヌがネアンデルタール人を絶滅させた』パット・シップマン著 河合信和監訳 柴田譲治訳 原書房 2016.1
- 『日本陸軍とモンゴル』楊海英著 中央公論新社 2015.11
- 『発達障害の子どもを伸ばす魔法の言葉かけ』shizu著 平岩幹男監修 講談社 2013.12
- 『アベノクライシス』川内博史著 竹書房 2015.6
- 【家庭・芸術・趣味・文学一般 ほか】**
- 『異類婚姻譚』本谷有希子著 講談社 2016.1
- 『つまをめとらば』青山文平著 文藝春秋 2015.7
- 『ニッポン沈没』斎藤美奈子著 筑摩書房 2015.11
- 『ロマンシエ』原田マハ著 小学館 2015.11
- 『死んでいない者』滝口悠生著 文藝春秋 2016.1
- 『朝が来る』辻村深月著 文藝春秋 2015.7
- 『ことり』小川洋子著 朝日新聞出版 2016.1
- 『謎の毒親』姫野カオルコ著 新潮社 2015.11
- 『ラオスにいったい何があるというんですか？ 紀行文集』村上春樹著 文藝春秋 2015.11
- 『赤めだか』立川談春著 扶桑社 2015.12
- 『羊と鋼の森』宮下奈都著 文藝春秋 2016.1
- 『君の臍臓をたべたい』住野よる著 双葉社 2015.6
- 『この国のかたち 1－6巻』司馬遼太郎著 文藝春秋 1993.10
- 『空飛ぶタイヤ 上・下』池井戸潤著 講談社 2009.9

- 『教場2』長岡弘樹著 小学館 2016.2
- 『ストーリー・セラー』有川浩著 幻冬舎 2015.12

《図書紹介》



『絵本 母と暮らせば』

- 文・山田洋次 絵・森本千絵 講談社 2015.11
- 文は、山田洋次監督自身によるものです。原爆で息子を失った悲しみが伝わってきて、自然に涙がでてきてしまいます。

編集後記

図書館業務になってから、2年。「なぜだろう？」と思うことが度々あります。図書の受入れ登録の業務では、書名をそのまま登録しますが、同じシリーズなのに、途中で書名が変わったりすることがあります。表記が変わると、検索の仕方によっては、検索できないこともあります。

平成22年度は『子どもの学習費調査』だったのが、平成24年度『子供の学習費調査』になっていたことを知りました。

文部科学省で2013年の7月刊行物から「子ども」から「子供」へ公用文書の表記が統一されたようです。「なぜだろう？」と調べてみるのは、興味深だけでなく、いろんな背景がみえます。

皆さんもぜひ調べてみてください。

お忙しい中ご寄稿いただいた藤川様、横川様に感謝申し上げます。「高い視座、広い視野、確か多様な視点を培う時間を持つ必要がある」ことに、心から共感しました。（川内）

教育図書館案内

- * 開館時間：10：00 ～ 16：30
- * 休館日：土曜・日曜日、国民の祝日、夏期及び年末年始の休館日、臨時休館日
- * 蔵書の貸出
貸出冊数：5冊／貸出期間：3週間
館外貸出には、利用者登録が必要です。
(ご自宅住所が確認できる身分証明書をお持ち下さい。受付で貸出カードを発行します。)
- * 返却方法
開館中 カウンター受付へ
閉館時 「ブック・ポスト」をご利用下さい。
設置場所：5F 図書館入口前
- * レファレンス・サービス
当館所蔵の図書・雑誌、その他教育に関するお問い合わせに対応しています。
- * コピーサービス
(白黒1枚10円／カラー30円)

特別コーナー

- 平和資料コーナー：
反核（原発関連を含む）・平和運動、平和教育教材、平和教育実践記録、戦争体験記など
- 日教組刊行物コーナー：
日教組教育新聞・雑誌（「教育評論」「月刊JTU」など）、教育政策、教育課程、教科書問題、各部の図書・資料など
- 教育総研刊行物コーナー：
年報、理論講座、ブックレット、季刊「教育と文化」、各研究委員会報告書など このほか旧国民教育研究所時代のあらゆる刊行物も含む
- 日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ
- 都道府県・高教組史誌、同機関誌
- 文部科学省統計調査報告書・刊行物：
学校基本調査、国際比較、教育費、学習指導

要領、指導書など

- 海老原治善文庫：元東京学芸大学教授、教育総研初代所長海老原治善氏からの寄贈書
- 鈴木喜代春文庫：児童文学者、元教育相談室相談員鈴木喜代春氏の著作本、寄贈書

蔵書の特徴

- 教育関係図書を中心に和書、和雑誌・新聞・洋書、洋雑誌などを収蔵しています。
- 2016年3月現在約65,700冊になります。
- 教育図書館のホームページの蔵書検索の画面から検索できます。
(<https://ilisod001.apsel.jp/kyoikutoshokan.lib/wopc/pages/TopPage.jsp>)
- 千代田区立図書館のホームページ「大学・専門図書館横断検索」からも教育図書館の蔵書が検索できます。

交通案内

- 神保町駅 A1出口より徒歩3分
- 九段下駅 6番出口より徒歩7分
- 竹橋駅 1b出口より徒歩5分
- 水道橋駅西口 徒歩12分（JR総武線）

